

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32618

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K21965

研究課題名（和文）清輔古典学の総体解明 ―清輔本・勅物・歌学書が共進化する3Dモデルの提唱―

研究課題名（英文）Elucidating Kiyosuke's Comprehensive Classical Studies: An Attempt to Depict the Totality as a Co-evolving 3D Model of Kiyosuke's Manuscripts, Reference Works, and Poetic Studies

研究代表者

舟見 一哉（FUNAMI, Kazuya）

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80549808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：平安時代の藤原清輔が行った古典文学研究の様態を、各作品に対する清輔の個別研究と、作品間の関係性に関する清輔の研究とが、相互に関連しながら深化する「共進化3Dモデル」として動的に記述することを試みる。研究成果を2点にまとめる。（1）清輔の勅撰集研究と私家集研究は、余白に書き込まれた勅物によって繋がっており、共進化していく。三代集の勅物と三代集以降の勅物は、撰集故実の解明が、その運用確認かという機能の違いがある。（2）考察の基盤となる清輔本諸本の網羅的書誌調査によって、奥書の再解釈による認定の是正や、新出資料の発掘が実現した。古筆切のツレを認定する新たな基準と課題についても新知見を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、清輔本や清輔古典学を分析する際の具体的手法が明瞭になってきた。清輔本金葉集のように奥書の再考を要する場合や、私家集に関する勅物のように出典注記であるという先入観を拭き取る必要のある場合もある。ひとつの作品だけでなく、清輔本全体を見据えた包括的な視座が研究には必要であることも明瞭となった。清輔本に関わる伝本の搜索は、零本や古筆切も含めて継続されるべきであることも示し得た。そして古筆切どうしをツレと認定するときは、字高の比較や、紙質の光学的観点からの比較によってその精度が増すことも実証した。これは文理横断・融合型の思考がもつ有効性を実社会に還元し得た成果でもある。

研究成果の概要（英文）：This report dynamically describes the classical literature research conducted by Fujiwara no Kiyosuke in the late Heian period as a "co-evolution 3D model." This model shows how his individual studies of each work and his research on the relationships between works evolved together. The findings are summarized in two main points:
1, Kiyosuke's studies on imperial anthologies and private collections are interconnected through marginal notes, evolving together. The notes in the three imperial anthologies and those in subsequent collections have different functions: one clarifies the compilation practices, and the other confirms their application.
2, Comprehensive bibliographic surveys of Kiyosuke's manuscripts have led to corrections in identifications through reinterpretation of colophons and the discovery of new materials. New insights have also been presented on the criteria and challenges in identifying related fragments of ancient manuscripts.

研究分野：人文学

キーワード：藤原清輔 歌学書 勅物 古筆切 後拾遺和歌集 金葉和歌集 古今和歌集 寂恵

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平安時代末期の藤原清輔が行った古典文学研究は、(1)本文を校訂する、(2)考証結果を写本の余白に勅物として書き込む、(3)考証結果を歌学書にまとめる、という三種類の方法・形式がある、との仮説を、報告者は三代集を中心に提唱してきた。ただし、その際には分析対象とできていなかった作品があり、また、時間軸という縦方向の深化については十分に考察できていなかった。これらの課題を解決できれば、清輔の行った個別の古典文学研究を、清輔古典学という総体として、かつ動的様態として捉えられると考えるに至った。

2. 研究の目的

以上の背景・動機から、主に三代集以外の作品を対象として、藤原清輔が行った古典文学研究の様態を分析する。その際、清輔が同じ作品の研究を繰り返し行うことで理解を深化させている事実を踏まえ、横方向の接続・広がりだけでなく、時間軸という縦方向の深化も同時に進んでいく様態として記述することにする。つまり、清輔の研究を、各作品の個別研究と、作品間の関係性の研究とが共鳴し合う姿として、本文・勅物・歌学書という三つの柱によって共進化する動的3Dモデルとして、清輔古典学 という包括的視野から、総体を可視化して提示することを目的とする。

3. 研究の方法

まず、現存する清輔本について、零本や古筆切をも含めた現存伝本の網羅的調査と整理を行う(海外収蔵品も含む)。次に、本文と勅物の特質を分析し、関連する歌学書の記述との相互関係を解明していく。そして、清輔古典学内での定位を行う。最後に、勅物がいわばリンクの役割を果たしていることに注目し、作品を越え、清輔本同士がつながり、また歌学書ともつながる様態(横に広がっていくネットワーク)として清輔古典学を記述する。かつ、清輔が繰り返し同じ作品の校訂を行うことで深化していく勅物、およびリンク先の別の清輔本との連関(縦に広がっていくネットワーク)を記述する。以上を踏まえ、最終的には、これらを共進化という概念によって立体的包括的に記述する。その際、効果的に可視化できるよう、本文・勅物・歌学書が有機的に繋がる動的3Dモデルとして描くことを試みる。対象は三代集に加え、清輔本後拾遺集と金葉集、伊勢物語・大和物語とする。

4. 研究成果

最初に、主な成果を5点にまとめる。

(1) 清輔本金葉集の研究：

清輔本金葉集について検討するため、現存伝本の網羅的調査と整理を行う過程で、清輔本であるとこれまで推定されてきた伝本の奥書を再考した。承安五年の清輔奥書と考えられる奥書には、「以大進殿本校畢、朱筆彼本勅物也」(清輔本を使って校合した。朱筆がその清輔本にあった勅物である)という一文があるため、ここにいう朱筆の勅物とは具体的には何であるか検討されてきたが、この一文の文字の大きさや書き出し位置から、清輔本金葉集による校合を意味する一文ではないと推定した。かつ、奥書全体は藤原季経の書いた奥書と考えられてきたが、問題の一文の前で奥書を区切って読めば、前半は清輔の奥書、後半は季経の奥書と解釈できるため、これまでのように、朱筆で書かれた勅物を探す必要はなく、また、季経の行為と考えられてきた前半部に書かれている校合作業は、清輔の行為であると考えてよいとの私案を示した。以上の解釈に従えば、承安五年の奥書をもつ伝本および勅物を清輔本と認定して分析し、ついで別の伝本(建長元年の奥書をもつ写本など)をそれと比較することで、清輔本金葉集は再建できると推定した。本論は、従来の再建方法を根底から考え直し、分析する順番と方法を新たに具体的に示した点に意義があることが、学界時評でも取り上げられ、評価された。

(2) 清輔本古今集・後撰集の勅物と私家集との連関：

清輔本古今集・後撰集にある私家集勅物が清輔古典学においてどのような機能を有しているか考察し、勅撰集と私家集が勅物によって繋がり、私家集研究によって勅撰集研究が深化していく清輔古典学の特徴を指摘した。清輔本古今集と後撰集には、私家集について触れた勅物が極めて多く存する。従来は漠然と、その歌が他文献資料にあることを示すものと捉えられ、また、その勅物から清輔の所持していた私家集が復元できるかと考えて利用されてきた。しかし、私家集勅物は網羅的調査の結果ではなく、勅撰集と私家集の相違点を明示し、勅撰集はどのように構成された作品なのか、撰集故実を考察しつつ、勅物として明示しておこうとするものであったと推定した。清輔古典学にとって私家集とは、勅撰集を分析し、撰集故実を明らかにするための工具であったことを、勅物の分析から示したものである。

(3) 三代集以後の清輔本勅撰集にある私家集勅物の性格：

上記(2)を踏まえ、三代集と比較すると、清輔本後拾遺集や金葉集には、私家集動物が著しく少ない、あるいは全く無い事実を指摘した。そしてその要因は、証本がない、あるいは見ることができなかったこと、そして、これらが三代集を古代とみて、それ以降を当代・近代とみる清輔の和歌史観と連動するのではないかと推定した。三代集と私家集の比較研究から撰集故実の解明を行ってきた清輔は、三代集以降の当代・近代の勅撰集と私家集の比較から、撰集故実の運用を確認していたと推定される。清輔は、故実と運用の両方を理解し、両者を知りうる自分こそ次の勅撰集撰者に相応しいことを、動物を書き加えた証本でもって貴顕に顕示していたと考えうる。

(4) 清輔本後拾遺集の発見：

上記(3)の研究過程で、清輔本金葉集には清輔本後拾遺集の動物と酷似しすぎている部分の存在が判明した。この二つは、申請時の仮説では「関連している」といった程度の関係とみていたが、「転記・流用」といった関係を疑うべきであることが判明し、仮説の抜本的再検証を要することとなった。そのため、現存する後拾遺集諸伝本の分析を進めた。その過程で、学界未紹介の清輔本後拾遺集らしき零本を発見し、清輔本後拾遺集の校本を作成していったが、さらにその後、より重要な写本2点を発見し、校本の底本を新出本に切り替える等の再調整を進めている。校本の公開にあたっては近時関わることとなった TEI 技術の利用を模索している。

(5) 清輔本に関連する寂恵本資料の発見：

清輔本古今集と関連を有する寂恵本について調査する過程で、重要文化財に指定されている寂恵本拾遺集(上帖のみの零本)の、散逸した下帖に相当する可能性のある古筆切を発見した。これまで一葉も発見されていなかったものだけに、その社会的重要性から、当該資料の報告と考察を和歌文学会第68回大会にて急遽行うことになった。その際、寂恵筆古今集の断簡である石見切も数点新たに発見したため、その整理も同時に進めた。

次に、以上の主な研究を行う過程で得た研究成果について述べる。

(6) 古筆切のツレを認定する基準に関する報告：

或る古筆切同士がツレの関係にあることを明確に示す新たな視点を提示した。

字高：

紙自体の大きさは後で裁断されて変化するが、文字が書かれている一行あたりの高さ(長さ)は原則として変化しない。和歌集の場合は、詞書や作者、左注が書き始められる位置(和歌の文頭からの距離)も原則変化しない。したがって、書誌をとる際、字高を測定しておけば、古筆切同士の関係性を明確にしやすくなるとの提唱を行った。その具体例として、上記(5)の寂恵本拾遺集と、複数種が混在しつつ残っている寂恵筆石見切、補書巻を含む寄合書の源氏物語写本などを取り上げ、字高の違いに注目すれば分別可能であると論じた。

紙質(a)：

紙質の調査は観察者の主観によるところが大きいが、できる限り客観的に記述され、第三者による再検証が可能であることが望ましい。そこで、科学的手法によって数値化できる方法として、高精細デジタルマイクロスコープによる光学的手法、とくに三次元表面粗さによる比較について論じた。【図1】

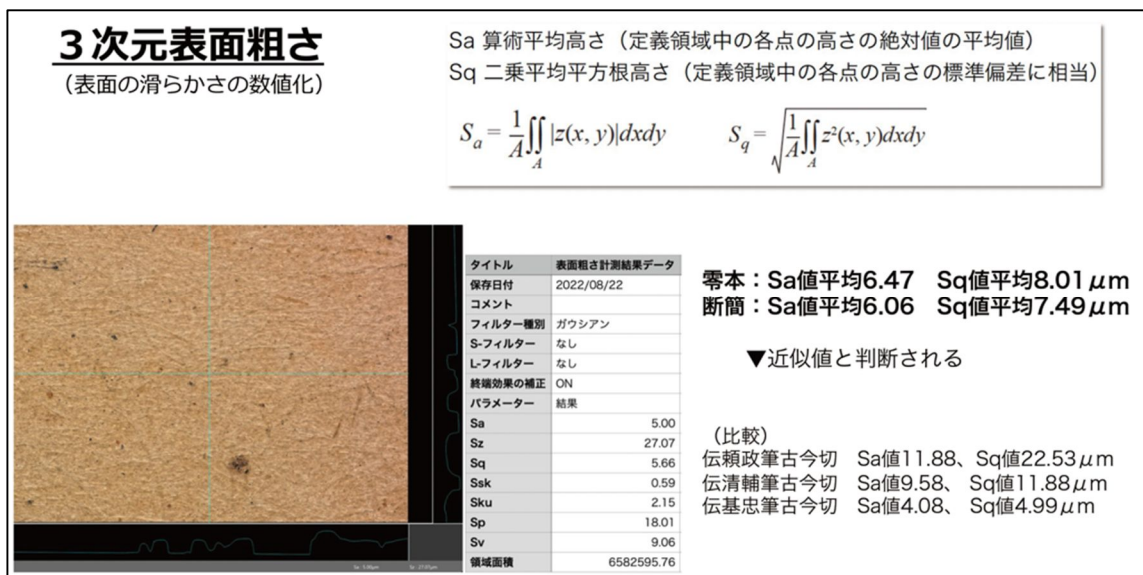


図 1

紙質 (b):

上記 がスタンダードな手法になるためには、当時の製紙に関する知識や、光学的研究方法の前提知識についてひろく共有しなければならない。しかし、現在行われている料紙研究の手法には課題が山積していることがわかったため、共有するまえに解決しておくべき点とその解決方法について論じた。

データ駆動型研究の必要性:

急速にデジタル化が進み、AI 技術が進化している現状から、古筆切研究のインフラをデータ駆動型にアップデートする必要性のあることを国際シンポジウムで報告した。当日の発表資料は researchmap にて公開、また発表内容と鼎談の動画が国文学研究資料館 YouTube にて配信されている。本シンポジウム的一端は『読売新聞』(2022年8月31日朝刊)の文化面にも「デジタル顕微鏡や AI 活用 古典籍年代などの特定」として紹介され、研究成果を社会へ発信することもできた。

最後に、清輔本関連資料を調査する過程で知り得た古典籍や古筆手鑑などについて報告した成果を挙げる。

高知県立高知城歴史博物館蔵古筆手鑑 (乙)

土佐藩山内家伝来の資料を調査するなかで知り得た古筆手鑑 (乙) について、伝来と全ての古筆切の書誌および画像を調査報告した。もう一帖 (甲) については 2024 年度に報告する。

紫式部集の筆跡

上記 に関連して資料群の筆跡を調査するなかで、実践女子大学蔵紫式部集の書写者が猪苗代長珊である可能性に気づき、報告を行った。

研究成果を踏まえ、今後の展望について述べる。古典籍のデジタル画像が急速に公開されるに至り、清輔本を含む勅撰集類を容易に (再) 発見できるようになったため、清輔古典学を示す写本類の総体の把握に計画時よりも時間を要している。写本群の調査は、考察の土台となる基盤研究であるから、慎重に進めていきたいと考えている。また、清輔古典学を継承する、義弟の顕昭の学問との相互連関が、申請時での想定以上に密接であることも判明した。両者を切り分けて検討するほうが研究を進めやすいと考えていたが、むしろ両者の絡み合い具合こそ検証すべきであったことが分かってきた。そこで、本研究課題の問題点を発展的に解消するため、両者の古典学が相互に接続する 複合的 の共進化モデルとして捉え、六条藤家古典学の全体像を把握する方向へ転換する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 舟見一哉	4. 巻 26
2. 論文標題 字高の効用	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル = Academic journal of Japanese literature	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟見一哉, 久保木秀夫	4. 巻 6
2. 論文標題 高知県立高知城歴史博物館蔵 古筆手鑑（乙）について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高知県立高知城歴史博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟見一哉	4. 巻 48
2. 論文標題 誌上講演：実践女子大学蔵『紫式部集』に関する新知見	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 りんどう	6. 最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 舟見一哉	4. 巻 70
2. 論文標題 『一葉抄』の断簡一葉	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武蔵野文学	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟見 一哉	4. 巻 20
2. 論文標題 清輔本勅撰集にある私家集勅物の存在理由と機能	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル = Academic journal of Japanese literature	6. 最初と最後の頁 26-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟見一哉	4. 巻 40
2. 論文標題 清輔本『金葉和歌集』の再建に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所『年報』	6. 最初と最後の頁 255-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002240	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 舟見 一哉	4. 巻 99
2. 論文標題 伝寿暁筆『古今集』断簡及び関連資料の諸問題 旧稿の修正をかねて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践國文學 = Journal of Jissen Japanese Language and Literature	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002243	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 舟見一哉
2. 発表標題 寂庵本拾遺集と古筆切：文理融合型古筆切研究の試み
3. 学会等名 和歌文学会第68回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舟見一哉
2. 発表標題 データ駆動型・文理融合型の古筆切研究は確立できるか？
3. 学会等名 古筆切研究の未来：文理融合型研究の成果第1回（国文学研究資料館×実践女子大学文芸資料研究所共催国際シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舟見一哉
2. 発表標題 清輔本勅撰集の勅物と私家集_三代集以後を中心に
3. 学会等名 中古文学会 第六〇回関西例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 田中登、横井孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 564
3. 書名 源氏物語古筆の世界（「西行の古筆切」および分担執筆）	

1. 著者名 廣田収、横井孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 404
3. 書名 紫式部集の世界（「実践女子大学蔵『紫式部集』は長珊筆か」）	

1. 著者名 江南和幸、佐藤悟、横井孝、新コディコロジー研究会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 296
3. 書名 紙のレンズがひらく古典籍・絵画の世界 New Aspect of Codicology, under the eyes of the Scientific Analysis of Paper (「光学的観点に基づく料紙解析から古筆切のツレを認定する際の課題と対策」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>データ駆動型・文理融合型の古筆切研究は確立できるか？ https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/245385/2b4a859f516be05aa0cfe6ec429db9cd?frame_id=525475</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------